

☆ 委託研究制度 ☆

当研究所には、国内の工業生産技術に関する諸問題の解決とその向上発展に寄与する一つの方法として委託研究制度が設けられている。これは当所が工業界に対してその使命を果す実際的方法の一つとして、当所本来の研究活動に支障のないかぎり尽力しているものである。

当研究所が委託研究を取扱う場合、比較的有効と思われる点は、工学のいろいろの専門分野がそろっている関係から、問題を種々な角度から研究し得ること、基礎から応用への長い発展過程を見たり、両者のバランスのとれた研究ができること、及び比較的安い経費で行い得ること等であろう。

委託研究の受理状況は、設立年度の昭和24年に10万円の予算を計上できたのを皮切りに、毎年増額が認められて、逐年活潑になり、昭和27年度は370万円を超過している。

○

委託研究の申込は、当所の業務課が扱っており、所定の委託申込書に記入すればよいので、申込は手続は至極簡単である。しかし研究計画をのべて上からは、希望の内容をよく知ることが重要なので、事前に下打合せをした方が、申込者、受託者相方にとって便利である。

○

申込を受けた委託研究は、当所の機関にはかつて、これを引受けるか否かを決定し、通常受付後1~2週間での返事を委託者へ伝えることになっている。

研究成果の公表に関して

国立研究所である当所としては、原則として所員の行った有益な研究は、発表する義務があるわけであるが、しかし公表によって委託者の利益を害するおそれがある場合も十分考慮している。すなわち、申出によって、

- 1) 研究完成後一定期間、公表を猶予する。
- 2) 公表する場合には委託者と協議の上行う。
- 3) 委託に際して提出された技術的秘事項は研究発表に加えない。

等の協定ができることになっていて、これは申すまでもなく委託者の利益を尊重する方針を示したものである。

○

発明、特許のあつた場合、その特許権は発明者のものとなるが、委託者側の希望に従つて

- a) 優先的実施を委託者に許諾する。
- b) 委託者以外の第三者に実施を許諾する場合には、委託者と協議の上行う。

等の方法もとり得るようになっていて、この点については、発明者の権利を保護することはもちろん必要であるが、委託者の権利も同時に十分尊重することを旨としている。

○

所要経費の算定は、器具費、材料費、光熱水料、旅費等を主とした実質的な経費とし、委託者と相談の上決定することになっている。経費の払込は、受託承諾後、期

日を当所から指定し、それによつて払込むことになっているが、研究上、会計上差支えないかぎり、払込指定日等については相談することができるようになっている。

受託規定は下記のようになっている。

第1条 東京大学生産技術研究所（以下本所という）に対し、生産技術に関係がある学理的問題又は物品等の研究・試作・試験・検定・製作・調査等を委託しようとする者があるときは、本所で適当と認めるときにこれを受託する。

第2条 前条の委託をしようとする者は、別紙様式(1)に定める申込書を提出しなければならない。受託を承諾したものに対しては、別紙様式(2)の受託承諾書を交付する。

第3条 受託の承諾を得た者は、第5条に定めた料金を指定の期間内に、本所に前納しなければならない。但し、特別の事由があるときは、前項の料金の分納又は後納を認めることがある。指定の期間内に前項の料金を納付しないときは、委託を取消したものとみなす。

第4条 一旦納付した料金は、これを返還しない。但し天災、その他やむを得ない事由によつて受託事項を遂行し得ないときは、その全部又は一部を委託者に還付することがある。

第5条 第3条第1項の料金は、委託事項に要する経費を算定してその都度これを定める。

第6条 本所が、受託事項実施中、特に多額の費用を要し、納付された料金の不足を生じると認めるときは、改めて委託者と協議することができる。

第7条 下記の各号の場合においては、委託者の受ける損害に対し本所は、その責を負わない。

- 1 天災、その他やむを得ない事由によつて、受託事項を遂行し得ない場合。
- 2 委託を受けた物品の試験・検定等の間に損害を生じた場合。
- 3 委託者が、その責務を完全に履行せずと本所が認めたときに執つた処理に基く場合。

第8条 受託事項が完了したときは、その経過並びに結果を委託者に報告する。但し、受託実施中において、委託者の希望によつて中間報告をすることができる。

第9条 受託事項に関する成果を公表するときには、本所がこれを行う。

前項の公表が委託者の利益を害するおそれがあると認められるときは、2年以内、その公表を猶予することができる。

第10条 委託者は、本所が必要と認めるときは、補助者を一定の期間中派遣することができる。

前項の補助者の勤務に関しては、本所職員に準じて取扱うが、給料・手当・旅費等はこれを支弁しない。

第11条 受託事項で、本所職員が発明したときにおける発明特許等に関する規定は別にこれを定める。

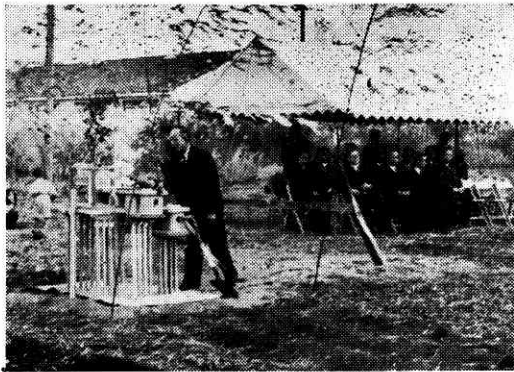
附 則

本規定は昭和25年3月11日から施行する。

IIS NEWS

☆ 特殊吹精実験室の地鎮祭 ☆

去る11月20日、第4部で地鎮祭が行われた。第4部金森研究室の長年の努力が報いられて、文部省より150KW高周波誘導電気炉一式の予算が許可となり、八幡製鉄株式会社よりこれに必要な建屋が寄附された。生研の施設面で新しい有力な設備ができ、今後の各部の利用と相俟つて強力に実験成果が挙ることを期待する。八幡製鉄より有田総務部長以下4名、東大より事務局長、営繕課長以下8名、中野組より大島社長以下6名、生研より所長、事務長以下多数、この他金森研究室は、金森教授以下多数が参加して盛大な式典が行われた。竣工予定は来年3月である。



地鎮祭当日の状況

☆ 軽金属賞受賞 ☆

軽金属協会では軽金属の生産、加工、応用に関する優

秀な研究報告、論文等の執筆者に軽金属賞を贈つて表彰することとなり、11月19日ブリッジストンビル講堂においてその第1回表彰式が行われ、当所における研究成果2件が受賞した。

その一つは安藤良夫助教授が工学部山県教授、元良助教授と共に「生研試作アルミ艇について」と題する論文である。これは船舶への軽金属利用を図るための基礎的な研究で、材質には加工性困難なアルミ合金56S- $\frac{1}{2}$ Hを使用し、銲接によつて日本最初のヨット兼船外機艇を設計試作し、併せて工作法、強度、耐蝕性の研究を行つたもので、この結果予想以上すぐれた性能の軽金属試作艇を完成し、爾後船舶への軽金属利用促進に貢献するところ大であるとして受賞したものである。

もう一つは星野昌一教授の行つた「軽金属家屋(V型)の試作」その他の論文である。これは建築への軽金属利用の基礎をなすものであつて、軽金属組立家屋の試作により経済的実用化の具体的資料を提供し、又建築の外装、内装又は附属品として使用される軽金属材料の標準寸法、装着法使用法等を解明して軽金属の利用促進に寄与するところ多大であるとして受賞したものである。

軽金属賞受賞者に対しては日刊工業新聞社よりも技術賞が贈られ、通商産業大臣、工業技術院院長等の祝辞があつた。

☆ 日本学術会議選挙の結果 ☆

去る12月10日 締切つた日本学術会議第3期選挙の結果、本所々長兼重寛九郎博士が当選した他、工学部関係では、青山秀三郎、山県昌夫、大山松次郎3教授が当選した。



次号予告 (1954年1月号)

研究解説

- X線透過に関するの問題……………一色 貞文他
- 日本の自動制御界現況……………高橋 安人編
- 鋳肌に関する研究……………千々岩 健児

研究速報

- 抵抗線歪計の木材への応用……………高橋 幸伯
森田喜代子
- マグネシウム電解浴の迅速分析法……………江上 一郎
- ブルドン管圧力計について……………小川 正義
古川 浩
- 高速度写真によるミシンの縫機構解析…植村 恒義
の研究

旅行記

- アメリカ合衆国の音響工学
(滞米メモから 3) ……糸川 英夫

その他 生研ニュース、部外活動等

筆者紹介

- ◇中村康治 技官 専攻 加工冶金学
- ◇安芸皎一 教授 工博 専攻 水工学(河川工学)
- ◇井口昌平 助教授 専攻 水工学(水理学)
- ◇高橋 裕 大学院特研究生 専攻 水工学(河川工学)
- ◇佐治泰次 助手 専攻 構造研究に関する研究
- ◇高橋安人 教授 工博 専攻 機械力学・自動制御
- ◇松永正久 助教授 専攻 精密加工学・電子顕微鏡及
電子廻折
- ◇坪井善勝 教授 工博 専攻 建築構造学
- ◇秋野金次 大学院学生 専攻 同上
- ◇星 和 教授 工博 専攻 交通工学(道路工学)
及土質工学

一 講 演 一

- ◇助教授 大島康次郎「自動制御最近の趨勢」機械学会日立地方講演会 (1953. 10. 16)
- ◇同上「テンブ時計の等時性について (第2報)」精機学会講演会 (1953. 10. 24)
- ◇教授 坪井善勝 助手 矢代秀雄「短期応力を対象とする梁ハンチの配筋効果に関する実験的研究」建築学会講演会 (1953. 10. 24)
- ◇教授 坪井善勝 大学院特別生 富井政英「短期荷重における鉄筋コンクリート架構の剪断抵抗と接合部の補強効果に関する実験的研究」同上
- ◇教授 星野昌一 助手 桑田 昭「色彩調節と建築配色の基本事項」同上
- ◇助教授 勝田高司 助手 後藤 滋「教室窓と通風について (風洞実験)」同上
- ◇教授 小野 薫 助手 佐治泰次「ブリネル携帯用硬度計によるコンクリート強度の判定(その一)」同上
- ◇講師 田治見 宏「実測地震動より建物の震度を算出する方法」同上
- ◇教授 小野 薫 助手 田中 尙「弾塑性ラメンの変形について (第1報 破壊荷重時の変形)」同上
- ◇教授 坪井善勝 大学院学生 秋野金次「扁平ドームの一般的解法」同上
- ◇教授 坪井善勝 助手 若林 実「円錐殻の現場実験—広島児童図書館の場合」同上
- ◇教授 坪井善勝 大学院特研究生 青木 繁「球形殻の現場実験—松山体育館の場合」同上
- ◇教授 渡辺 要「寒地アパートの防寒防露構造」同上
- ◇教授 坪井善勝 「建築の新構造法について」同上
- ◇助教授 山辺武郎「強塩基性陰イオン交換樹脂のアンモニア水再生の研究」電気化学協会討論会のイオン交換樹脂及び膜部門において講演 (1953. 11. 1)
- ◇助教授 鳥飼安生 大学院特研究生 根岸勝雄「超音波音源附近の音場の撮影」音響学会講演 (1953. 11. 2)
- ◇助教授 鳥飼安生 助手 藤森聰雄「薄板におけ

- る超音波の透過」同上
- ◇教授 久保田 広 助手 佐藤俊夫「三色分解干渉フィルター…テレビ用三色分解干渉フィルターの試作経過並にその結果の報告」応用物理学会講演会(1953. 11. 2)
- ◇大学院特研究生 松沢喜一郎「チタン酸バリウム水中超音波発射子における吸水の影響」同上 (同上)
- ◇助教授 田宮 真「船体抵抗試験について」造船協会秋季講演会 (1953. 11. 4)
- ◇教授 藤高周平「昭和28年度送電線雷実測」電力気象連絡会雷研究報告会講演 (1953. 11. 8)
- ◇助教授 加藤正夫 技官 中村康治「鋳物用 Al—10% Mg 合金の研究 (第2報) 熱処理の影響」軽金属研究会第回秋季大会 (1953. 11. 19)
- ◇教授 江上一郎 教授 岡宗次郎 助教授 武藤義一「マグネシウム 電解浴の迅速分析法について」同上 (1953. 11. 20)
- ◇教授 高橋武雄「硫酸セリウムによる分析法におけるクーロンメトリーの応用…高価なセリウム塩を何回でも繰返し使用するために CeIVの反応量を CeIIの電解酸化に必要な電気量の形で測定する方法に関する研究」分析化学討論会 (1953. 11. 29)

一 寄 稿 一

- ◇助教授 松永正久「電解研磨した金属の電子廻折透過法による研究」応用物理 Vol 22. No 9
- ◇助教授 野村民也「電子管式アナログ・コンピュータ (自動制御への応用)」機械学会誌 昭和28年10月号 733~736 頁

一 座 談 会 一

- ◇教授 坪井善勝「シャーレンに関する座談会」建築学会関東支部主催 (1953. 10. 17)

一 現 地 実 験 一

- …国鉄信濃川送電線における F型放障点標定器試験…
- ◇教授 藤高周平 助手 麻生忠雄 生研藤高研究室で創始した F型が日立製作所で製作完成し、信濃川千手発電所に設置された。昭和28年10月30~11月4日間に、深夜線路途中で人工故障を発生させ、標定性能を検討、概ね所期の成績を得た。

編 集 委 員

編集委員長 福田武雄
 編集委員 富永五郎
 糸川英夫
 植村恒義

編 集 員 委

大島康次郎
 橋 藤雄
 齋藤成文
 高木 昇
 ※安達芳夫

編 集 員 委

江上一郎
 山本 寛
 山辺武郎
 ※久保慶三郎
 勝田高司

編 集 委 員

星野昌一
 編集幹事 下村潤二郎
 編集室 水野晴明
 (※印は当番委員)

本誌の購読ご希望の方は
 下記へご照会下さい。

千葉市弥生町1
 生産技術研究奨励会
 振替口座東京 108697

第 5 卷 第 12 号 生 産 研 究

1953年11月25日印刷

(本誌は生産技術研究所の研究紹介誌として、毎月1回発行する)
 1953年12月1日発行

編 集 者 福 田 武 雄

印 刷 者 三 美 印 刷 株 式 有 限 公 司

発 行 所 兼 重 寛 九 郎

発 行 所 東 京 都 千 代 田 区 神 田 多 町 2 の 7
 東 京 大 学 生 産 技 術 研 究 所
 千 葉 市 弥 生 町 1
 電 話 千 葉 366-370